

英語を母語とする日本語学習者の中間言語的スタイル切り換え —文末形式を中心に—

今村 圭介

1. はじめに

本稿は、英語を母語とする日本語学習者の文末形式の中間言語的スタイル切り換えの中間言語的な特徴を記述するものである¹。言語の話者は、様々な発話場面で異なる言語変異的資源を利用して、社会的な規範に順応すると同時に、自らの規範で文脈を作っていく。日本語は敬語が発達している言語であるため、言語変異形式による待遇的な意味づけが強く行われる。第二言語話者の場合は、母語話者と同様の言語変異的資源を持たないため、同じように待遇の意味を正しく伝達することが困難である。特に丁寧体と普通体は日本語学習者にとって、用法の理解は簡単だが、実際の運用は難しい(野田 2001b)。

現在までに日本語教育では、学習者が異なるスタイルを運用できるようにするための体系的な指導は行われていない。その一つの原因として、その様な分野の研究の蓄積がまだ新しく、どのように何を指導する必要があるのかということが明らかでないという現状があるだろう。これまでの研究で、日本語学習者は異なる場面・相手で様々な言語形式を使い分けることが分かっている。しかし、学習者がスタイル切り換えをする上で、何に困難を覚えて、どのような工夫を凝らしているかのような中間言語的な切り換え行動の詳細はまだ十分に明らかでない。本研究では、英語を母語とする日本語学習者の文末形式の運用に着目し、その中間言語的なスタイル切り換えと背景にある要因を明らかにする。

2. 先行研究

これまで、日本語学習者のスタイル切り換えの研究は記述を中心に進んでいる。李(2002)、橋本(2002)、樋下(2002)では、それぞれ、韓国語、英語、中国語を母語とする1名の中級日本語母語話者が、異なる談話場面でどのようにスタイルを切り換えているかを網羅的に記述している。結果それらの学習者が切り換える項目が明らかになっている。

また、渋谷(1997)、李(2005)、上仲(2005)、寺尾(2010)、などでは、純粋に文末形式のみに注目し、日本語学習者のスタイル切り換えの言語内外的な要因について詳しく報告している²。上仲(2005)では、中国語母語話者が、注意度の持続の問題、

¹ スタイルは、様々な事象について言及する言葉である。の定義に従う。Cheshire & Bell (2002)は“the phenomenon that speakers talk in different ways in different contexts”と定義に従い、スタイルとは話者が社会的・心理的な要因で変化させる話し方とする。

² 近年研究が盛んなスピーチレベルシフトの研究は、文末形式を中心に「スピーチレベル」を設定しているが、文末形式が含まれない発話を含めた、全ての発話文を分析対象にする場合が多い。学習

特定表現の回避、定型表現の使用などから丁寧体と普通体を混用することが指摘されている。さらに、李（2005）では、韓国語母語話者が、母語の影響もあり丁寧体をンデス形式により簡素化し、文末形式の切り換えが行われていることなどが指摘している。また、寺尾（2010）では、中国語母語話者の適切なスタイル切り換えを阻害する言語内的要因を考察している。

これまでの研究では記述を中心に考察が行われてきており、なぜそのような切り換えが行われるかの考察もされてきている。しかし、それらは個別的な事例を集めたものであるため、考察が十分であるとは言えない。また、そのような要因の考察の上で、日本語教育でどのような点が考えられるべきなのかという問題に関してはほとんど考察が行われてないように見える。本研究では、日本語教育での指導を念頭に考え、学習者の中間言語的スタイル切り換えの記述考察を進めた上で、スタイル教育に向けた考察をしていく。

3. 研究概要

3.1 研究目的

本研究は、日本語学習者がスタイル切り換えをする中で、文末形式をどのように運用しているかを、異なる談話データと意識調査から考察していく。その上で、日本語教育でどのような指導が必要かを考察する。

3.2 研究概要

本研究では、以下の2種類の調査を行った。なお、話者の情報は表1に示す。

- (a) 国内在住の英語を母語とする中上級の日本語学習者6名の2場面の談話収録(各約30分、計360分)
- (b) 各言語変異の習得に関する意識、及び収録談話に関するフォローアップインタビュー

(a)の談話収録は、学習者のフォーマルな談話とカジュアルな談話でのスタイル変異項目の切り換えを記述するために行った。設定した2場面は、対親場面が、同年代・同性・同所属集団(教会)で親しい相手(SMF)との会話、対疎場面が、対話者が年上(60代)・異性・異所属集団で初対面の相手(OFS)との会話である。なお、談話収録は喫茶店で行い、話題の統制などは行っていない。また、(b)のフォローアップインタビュー(以下FUインタビュー)は、談話終了後に文末形式の使用意識を聞き、文字化終了後に再度不可解な切り換えの意図の聞き取りを行った。調査を行った学習者の情報は表1に示す。なお、学習者は全員20代である。また、文字化の際の文認定は宇佐

者の多くは、スピーチレベルへの気付きよりも、個々の形式への意識の方が高く、その点で文末形式のみに着目する方が学習者の中間言語をより効果的に捉える事が可能だと思われる。

美 (2007) による「発話文」を採用した。

表 1. 調査対象の話者の情報³

話者	出身	日本語学習歴	日本滞在歴	レベル
AM1	アメリカ	3年	1年	中級
AM2	アメリカ	4年	1年半	中級
AU1	オーストラリア	9年	6年	中級
AM3	アメリカ	9年	6年	上級
NZ1	ニュージーランド	7年	3年	上級
CA1	カナダ	9年	3年	上級

本研究では、録音談話から、文末形式の中間言語的なスタイル切り換えに関して、以下で考察していく。

4. 中間言語的スタイル切り換え

4.1 調査対象の切り換え意識と運用

調査対象の話者は、普段どの程度切り換えを意識するか、それができているか、収録した対話場面でどうだったかに関して得られた意識を表2でまとめる⁴。

表 2. 調査対象の学習者のスタイル切り換え意識

学習者	切り換え意識
AM1	切り換えをしないといけないのはわかっているが、難しい。
AM2	外人だからあまり切り換えをしないでもいいと思っている。
AU1	相手によって切り換えをするように心がけている。
AM3	相手によって切り換えをするようにしてある程度できると思っている。
NZ1	切り換えるようにしているが、難しい。
CA1	切り換えるようにしているが、OFSはフレンドリーだったからそこまで切り換えなくてもよいと思った。

学習者は、英語を母語とする日本語学習者のスピーチレベルシフトを考察した上仲 (1997) の結果と同様、相手によってほぼ適切に丁寧体と普通体を使い分けている様子が伺えた。切り換えをあまりしないと意識している AM2 も、使い分けをしていた。しかし、その中でも、独自に体系だった中間言語的なスタイル切り換えをしていることが見られた。それらを分類すると、a) 学習者が言語内外的要因からスタイルの切り換えが阻害されている例、b) 学習者がスタイルを切り換えようとしているが文末形式

³ 学習者のレベルは厳密な判断が必要ないと思い、ACTFL の OPI の基準を参考に筆者が判断した。

⁴ FU インタビューでは、「丁寧な言葉遣いを意識するか」という質問から、丁寧体と普通体、自称詞など複数の個別の項目の切り換え意識を聞いた。

でなく別の形式によって表出しようとする例、が見られた。以下それらを考察する。

4.2 言語内外的要因による正しい文末形式切り換え運用の阻害

4.2.1 母語の談話構造の影響による裸の普通体(Plain form)の多用

まずは、一部の学習者に談話における、説明のモノログの作り方に母語の影響が見られた。⁵例文1のAM3のモノログ発話は母語の影響から文末形式の正しい運用が阻害されている。

●例文1 (AM3 対疎場面)

AM3: まあそうですね、でも実は僕はなんか、バリバリビジネスの事が好きで、色々なビジネスの本を読んで、例えば経営とか、なんかマーケティングとか、金融、でもやっぱり、とか人間関係、でも僕のいつもびっくりされてることは、やっぱりそのビジネスの基本のことも、聖書にちゃんと書いてる、なんか人間の関係のことは。だから、やっぱり言われてることはやっぱり、月、月じゃなくて日の下で新しい事がない、ということわざがある。そしてやっぱり、何か聖書の**の**、聖書に書いてることも、なんか僕のビジネスの基本、のことに対しても書いてる。ビジネス、すごく有名なビジネスの本は、人を動かす、という本がある。とか、7つの瞬間の本もあるし、その、その本の基本の、考え方とか、基本のことも、聖書に、はっきりと聖書に書いてるから、やっぱり思ってる。だから、ほんとの事だったら、せい、なんか、聖書は、なんか生き方の説明のことだから、ほんとに、ほんとのものだったら、神様のことだけじゃなくて、ほんとに、生きることに対しては使わないとならないと思う。だから、それを聞いて、あーやっぱり、あってるなと思ってます。

OFS: ふーん。あ、人の動かしか、そういうことが聖書にも書いてあるんですね。あーそうなんですか。

裸の普通体は、発話に発話内容として表出・伝達したこと以外の、聞き手に対する含みや働きかけがないか、必要がないか、適切でない文脈状況で使用される(上原・福島 2004:117)。⁶母語話者の丁寧体基調の会話でもこのような裸の普通体は使用が見られる。しかし、多くは共同発話などに見られ、例文1のようにモノログ的な発話で多用されることは母語話者には見られにくく、違和感を覚える。また、初対面の相手との会話では失礼にあたる危険性がある。裸の普通体の多様の傾向の原因は、母語

⁵ 談話構造における母語の影響に関する研究は、渡辺(1996)がある。渡辺(1996)は、ドイツ語・中国語・韓国語を母語とする中上級の日本語学習者に4コマ漫画の説明をしてもらい、そのモノログ発話を考察している。テ形接続、接続助詞の使用など、指示詞の使用に着目して、談話展開方法に母語の影響が見られることを考察している。

⁶ 本稿でいう裸の普通体とは、文末にデス・マス、終助詞などのモダリティが付かず終了する普通体のことを指す。

に同じように使い分ける項目がないことに加え、母語の談話構造の影響によって起こっていると考えられる。メイナード (1993) は日本語の談話と英語の談話を比べ以下の記述をしている。

日本語会話の文末表現については、(中略)、終助詞、その他もろもろ感情表現が文末に付く事が多いこと、そしていわゆる「裸のダ体」で終わる文末形式は 11.98% に過ぎないこと等である。(中略) 米会話では命題に直接関係ある語彙のみで成り立っている文 - つまり日本語の「裸のダ体」に相当する - が多く、命題に聞き手目当ての“sympathetic circularity sequence”の付くものは少ない。(メイナード 1993:124)

つまり、英語の談話においては、日本語の文末表現に見られるような、聞き手に働きかける形式が現れる事が少なく、命題のみの裸の普通体に対応する発話が多い。その談話構造がそのまま AM3 の日本語に影響し、裸の普通体の多用につながっていると考えられる。通常のやり取りの中ではこれが表面化しないが、例文 1 のようにまとまったモノログ的な発話の場合には、日本語の談話構造を意識することができず、裸の普通体が産出される。⁷

4.2.2 マス形式の複雑な切り換えシステムの合理化

日本語学習者にとって、普通体と丁寧体の産出は、異なる活用体系を考えながら産出しなければならないために、切り換えが難しい。普通体と丁寧体の産出はある程度共通点もあり、片方の文体の知識と運用能力をうまく活用するのは自然のことであると考えられる。学習者はマスの代わりにインデスを使用していて⁸、普通体を活用して丁寧体の産出を容易にする様子が見られた。以下例 2, 3 はその様な例である。

●例文 2 (AU1 対疎場面)

OFS: じゃあ、オーストラリアの中学校時代は、アニメとかすごく、見ていたんですか、日本製のアニメとか、マンガとか。

AU1: あんまり、見てなかったんですね。

●例文 3 (AM3 対疎場面)

OFS: あの座禅とか。

AM3: あー、あんまりしないんですね。僕はキリスト教しんしょうしゃ、信仰者だか

⁷ これは、分析に含めていない別の英語母語話者や KY コーパスの英語母語話者にも見られる特徴であった。他の母語話者に関して、筆者の普段の観察では、韓国語母語話者には見られなく、中国語母語話者には多少見られるようである。迫田 (2003) が述べるように、比較をしない限り母語の影響と結論付けるのは、難しいが、筆者の経験的には、母語の影響が認められる。

⁸ 李 (2005) で韓国語母語話者にこの現象が見られ、母語の影響による、過程的転移が起こっているとしている。李 (2005) は、厳密な意味で比較できないとしつつ、先行研究の談話データから他の母語話者では同様の結果が見られないことから考察している。峯ほか (2002) で考察されているような、母語より、自然習得環境か教室習得環境化が影響するのではないかと考えられる。

ら。あんまりしない…

これまでの研究でも、主に自然習得環境を経験した学習者にンデスの誤用が多い事が指摘されているが(峯 2002、金澤 2008 など)、これには日本語の丁寧体の構造のシステムが関わっていると考えられる。野田 (2001) では以下の表3のように日本語の不合理的丁寧体のパラダイムが存在するとしている。その上で、A 系列の方が多数活用があり、形容詞が A 系列の活用に統合されてもおかしくないが、B 系列の方が合理的であることを以下の3点を理由として述べている。

表3. 丁寧体過去形のパラダイム (野田 2001a:47 の図を一部修正)

品詞\系列	A 系列(丁寧—過去)	B 系列 (過去—丁寧)
形容詞	暑いでした	暑かったです
動詞	書きました	書いたです
名詞	雨でした	雨だったです
形容動詞	静かでした	静かだったです

- ① B 系列は、丁寧さを表す形が「です」で統一されている。(A 系列は、品詞によって「です」を使ったり、「ます」を使ったりする。)
- ② B 系列は、非丁寧形 (例えば「書いた」) に「です」をつければ、全て丁寧形 (例えば、「書いたです」) になる。(A 系列は、非丁寧形・丁寧形の形の違いに統一性がない。)
- ③ B 系列は、過去を表す形が先に来て、丁寧さを表す形が後に付く日本語の一般的な語順と一致している。(A 系列は、逆の語順になっていて、日本語の一般的な語順に反する。)(野田 2001a : 49)

ンデス形式は、図3の形式におけるB系列と特徴を同じくするため、学習者にとって産出がより簡単な形であるのに加え、文法的には間違えてない形である。

紙幅の関係上結果の詳細を提示できないが、被調査者の数人に対してンデスを含めた丁寧体の複数の形態の簡単な文法性判断を行ったところ、「いかなかったです」「いけないです」など、「普通体+です」形は誤用と、「普通体+んです」形は正用と判断する傾向にあった。NZ1は「マスはあまり使わない、「行きます」の代わりに「行くんです」と言う、そっちの方が言い易い」と述べていた。さらに、ほぼ正用誤用の判断が正しかったCA1でも、「ンデスを多く使用している気がする」と自身の発話について内省していた。つまり、ノ(ダ)の機能を理解していない学習者は、丁寧体産出の合理化の道具として、ンデスを使用し、機能を理解していても、学習者の中間言語の体系の中に、ンデスを単なる丁寧体として利用するシステムが自然に組み込まれるのだと考えられる。マス形式の丁寧体と、普通体の二つの活用を覚えるよりも、普通体の活用のみを覚え、ンデスを後接させる方が、学習者にとって容易な切り換えであるため、このような合理化された切り換え体系を作るのである。

4.2.3 デスからダへの単純切り換えによる合理化

学習者は、普通体を活用することによって丁寧体の産出を容易にすると同時に、丁寧体を活用して普通体の産出をしている様子も見られた。例文4のように、普通体を産出するとき、デスからダへ単純切り換えをすることによって、ダには認められない意味機能を表そうとしている。

●例文4 (AU1 対親場面) <将来子供をバイリンガルに育てるかという話>

AU1: やっぱり、まあ、将来のこともわかんないけど、でもやっぱり、あの、なんか、子供の、なんていう夢によって違うと思うんだね。日本語、日本で、生活したいと、日本語も、はなさなきやいけない。で、読まなきやいけない。でも海外で…

●例文5 (AU1 対疎場面)

OFS: 日本人も多いんですか?

AU1: うーん (そうでもない?)、そんなに多くはないですね、やっぱり、僕の、私の、なんて言う、地元、まあ、なんか中央、都心じゃないんですね (うんうんうん)、で、私の地元の、なんて言う、周り、日本人、いなかったんですね。

例文4は、「思うんだね」という表現には違和感がある。「んだね」という形式自体は存在するが、意味用法としては、相手の気持ちを察したり発話を受けたりして、それを確認する場合に使われる。つまりAU1が伝えようとしている話し手自身の考えを伝達する意味機能は持っていないのである。野田 (2001b) が述べるように、デスとダを単純に変換しただけでは、かなり違和感のある文になる。

以下で野田 (2001b) の例を挙げる。しかし、ダとデスは形式、意味機能共に対応する部分が多く、形式は表4のように全て一対一で対応していて、単に待遇の差を表しているように見える。AU1はそうした点を理解せず、例文5のようなンデスネの機能⁹を利用して、上の例文4のようなンダネを産出しているのである。

表4. デスとダの形式の対応関係

丁寧体形式	普通体形式
です	だ
ですね ですよ	だね だよ
んですね んですよ	んだね んだよ

AU1は、「デスが丁寧、ダが丁寧でない」という意識が強いいため、そのようなデス・ダの単純切り換えをし、普通体を産出していると思われる。教室学習を経験したものに、こうした意識を持つものは少なくなく、他の母語話者でも同様の切り換えが見ら

⁹橋本 (2004) で、このようなンデスネは、直後に文が続く場合が多く、後続文の前提を表す機能を持つと述べている。

れると思われる。さらに、ンダスネ・ンダネの例は単純切り換えの一例であり、デス・ダの単純切り換えによって起こる不自然な普通体は他にも存在する可能性が高い。

4.3 別形式による対者待遇の表出試み

以下では、学習者が丁寧体で表わすべき対者待遇を別の形式によって表そうとしている様子が見られた。それらは、ポライトネス・ストラテジーを担う形式と尊敬語・謙譲語形式である。

4.3.1 ポライトネス・ストラテジー「と思います」の過剰使用

母語で行っている方略的なスタイル切り換えが日本語でのスタイル切り換えに使用している例が見られた。

●例文6 (AM1 対疎場面)

OFS: えーいなかったんですか、そうですか、うん、じゃあオーストラリアはあまり行ってないんですね、日本人はね。

AU1: うん、やっぱりね、都心の方住んでと思いますね。

OFS: あー、うん、仕事で来る人とかね

AU1: 都心かも知れないですね、そんなに、なんか、都心からそんなに遠くないところに住んでと思います。

例文6の場面では、聞き手の領域にない情報を伝える場面であり、断定的に述べる方が自然で、「と思います」の使用は違和感がある。しかし、英語ではこうした文でI thinkの使用は可能であり、話し手の情報の不確定さを示すことによって丁寧さを表している (Brown & Levinson 1987)。FUインタビューでもAM1に「と思います」をなぜ使用するかと聞いたところ、「丁寧だから」と答えていた。母語でのスタイル切り換えをそのまま日本語に応用する様子が見られている。さらに、この「と思います」を、丁寧さを表す定型表現 (prefabricated pattern)として、丁寧体産出に利用している学習者が見られた。

●例文7 (AM1 対疎場面)

OFS: ああ、じゃあもうじき帰るんですか?

AM1: ああ、もう少しで帰る、多分、あの一、いちにち、二月の後で、多分もう帰ると思います。

●例文8 (AM1 対疎場面)

AM1: でも、良かった、止まったときは、まだ間に合ったと思います。

例文7,8では、英語でも“I think”を使用しないと思われるが、丁寧さを表すために「と思います」を使用している。例文7では、既に帰る具体的な日にちが決まっていて飛

行機も予約していたにも関わらず「と思う」を使用している。例文8では、過去に起きたことについて話している場面で「と思う」を使用している。このような「と思う」の使用は、日本語のシステムの複雑さが影響すると考えられる。日本語の丁寧体の活用体系は複雑であり、学習者にとっては産出が容易でない。そのため、学習者は様々なストラテジーを使い丁寧体を産出する。「と思います」は普通体に後接するだけで丁寧体の産出を可能にするため、AM1のように普通体に慣れた学習者は丁寧体産出のストラテジーとして利用する。AM1は産出した丁寧体の文の74例中、42例が「と思います」であった。つまり、丁寧体への切り換えを簡単にするために、AM1は母語で使用する丁寧な表現を、それが使えない場面にも拡大利用しているのである。

4.3.2 日本語敬語形式の過剰利用

また学習者には、敬語形式を使用して、対者敬語を表そうとする様子が見られた。例文9では「させていただく」が利用されている。

●例文9 (AM3 対疎場面)

AM3：そうですね、大学、僕はアメリカの、アメリカの大学の三年生の時、留学生として、同志社大学で、一年間で、勉強させていただきました。

本来「させていただく」は相手の依頼や許可、恩恵などを受けて行う行為に使用される表現である。つまり、例文9のような相手が恩恵や許可に関係しない場合は「させていただく」は不適切である。話し手の行為に関わる人物に対する素材敬語が、話し相手に対しての対者敬語として変換され、使用されていると考えられる。このような「させていただく」は、母語話者の間でもしばしば問題にされることがあり、学習者と母語話者に共通に見られる現象である。¹⁰

●例文10 (AM3 対疎場面)

OFS：あーそうですか、京都はホームステイですか？

AM3：そう、ホームステイされて、されていました。

さらに、例文10のように、尊敬語の形式である「され」が対者敬語のように使用されていると考える例である。つまり、日本語学習者は、「される」のような形式を使用できるが、それがどのような場合につくかわからずに、対者敬語として使用してしまうのである。前述のように敬語の用法は母語話者の間でも問題になるため、日本語学習者にとっては、さらに用法の理解が難しいと思われる。

¹⁰ 例えば、Googleの検索エンジンで「させていただく」を検索すると、母語話者の間で例文9と同様に本来の使用規範を超えて過剰に使用されていることを問題として取り上げている記述が多く表れる。

5. 文末形式の中間言語的切り換えのまとめ

本稿では、談話データから、英語母語話者の文末形式に着目して中間言語的なスタイル切り換えについて、分析してきた。日本語学習者は、問題別に分類すれば、文末形式を正しく使えない問題と、文末形式の対者待遇機能を他の形式で表現しようとする問題の2点が見られた。さらに、それらを要因ごとに分類すれば、表5のようになる。

まずは、L1の影響から、中間言語的なスタイル切り換えが起こる例として、母語である英語の談話構造や、スタイル切り換えの方略が、日本語に転移している様子が見られた。次に、L2の複雑な言語体系が影響するものとして、日本語の丁寧体の不合理な体系が影響して、学習者は「ンデス形式によるマス形式の代用」、また「デスからダへの単純切り換え」をすることが見られた。さらに尊敬語謙譲語形式を対者敬語として利用する様子が見られた。これらは学習者の母語を問わず学習者全般に見られると思われる。さらに学習者のL2運用能力が影響する例として、学習者によっては丁寧体の産出を容易にするために、定型表現「と思います」を過剰使用することが見られた。また、本稿では詳しく触れなかったが、学習者は体系だったスタイル切り換えの他に、モニターの機能が下がることによって、意図せずに丁寧体と普通体が混ざってしまう場合も少々見られた。意識をすれば使い分けができるという点で、形式への注意度がかかわってくると言える。無論、そもそもの理由は、切り換えに習熟していないのが原因の混用である。

表5. 文末形式の中間言語的スタイル切り換えの分類

影響	中間言語的スタイル切り換え
L1	裸の普通体の多用
	丁寧表現として「と思います」の使用
L2 言語体系	デス・ダの単純切り換え
	ンデス形式によるマス形式の代用
	尊敬語・謙譲語形式を対者敬語として利用
学習者の L2 運用能力	定型表現「と思います」の多用
	習熟度不足／注意度の低下による混用

6. 日本語教育での指導に向けて

これまで、日本語学習者が見せる中間言語的切り換えについてまとめてきた。そこから日本語教育でどのようなスタイル切り換えの指導が必要かを考察したい。中間言語的なスタイル切り換えが起こる要因は複数あるが、問題となるのは、文末形式の運用が正しくできない点と、別の形式を文末形式と同じ対者待遇機能を付与しようとする点である。そこから、日本語教育で必要な指導は以下の2点が考察できる。

- ① 丁寧体と普通体それぞれの談話構造に関する指導
- ② 日本語の談話の丁寧度を担う形式についての指導

デスとダを単純に切り換える点、母語の影響から裸の普通体を多用する点など、普通体と丁寧体の文機能と待遇機能の間違った運用を改善するためには、「丁寧体・普通体の談話構造を意識した」指導が望まれる。

これまで、初級日本語教育では文の骨格、構造の部分に焦点を当てすぎる傾向がある。しかし、実際のコミュニケーションの中では、文の骨格以外の点も重要になり、文末のモダリティによる調整行動が頻繁に起こり、談話が作り上げられる。中級以降でも、そのような文の骨格以外の指導が行われることが少なく、学習者には母語話者とのコミュニケーションの中で習得していくことが期待される。結果として、丁寧体と普通体の不自然な混用が起こったり、間違った機能を表すために使用されたりする。丁寧体と普通体それぞれのスタイルの談話構造を意識させ、それらを独立して習得させるようにするべきである。そのためには、母語話者のコミュニケーションの両者の談話構造を明確に記述した上で、それに近い形のコミュニケーションを目標言語とする必要がある。実際の母語話者同士のコミュニケーションに近い会話を目標とするということはしばしば主張されることだが、複雑な切り換えを要する丁寧体と普通体の意味機能を正しく習得するためにも、必要になってくるのである。今後、学習者が習得すべき普通体と丁寧体のそれぞれの談話の型を明らかにする研究が望まれる。

また、丁寧度を担う形式が何であるのかを、また日本語の敬語行動の規範を明示的に指導しなければならない。「と思います」はもちろん意味的な誤用もあるわけだが、日本語では、情報の不確定さを表すことより、文末形式による「わきまえ」の敬語行動が重要であることを教える必要がある。また、「させていただく」や「尊敬語」の正しい用法に関しても形式だけでなく、どのような場面で使うかを理解させることが重要である。これまでの日本語教育は機能より形を重視する「形式中心主義」の傾向が強い(野田 2005)。そのような「形」の指導のために、だれにでも敬語を使わせるような練習を行えば、敬語の用法への理解が逆に混乱し、本来持つ意味が失われかねない。敬語表現は形より先に、使う場を明示的に理解しなければ、本来の意味が失われてしまい、混用による間違った印象を与えるだけになりかねない。つまり、正しい社会言語規範を明示的に与えることが、形の習得より重要なのである。

本論文では必要な指導を明確にしてきたが、具体的な活動までは考えることができなかった。今後は、指導の体系を具体的にしていくための研究を行いたい。

謝辞

本稿は2011年9月に龍谷大学で行われた第28回社会言語科学会研究大会でポスター発表をした内容に加筆修正を加えたものである。発表当日に有益な意見を下さった方々、また本稿を査読して下さった匿名の先生方、そして指導教官のダニエル・ロング先生に感謝の意を表したい。

参考文献

- 李吉鎔 (2002) 「韓国語母語話者のスタイル切り換え」『阪大社会言語学研究ノート』
4:73-93 大阪大学大学院文学研究科社会言語学講座
- 李吉鎔 (2003) 「フォーマルな談話での非デスマス形式の切り替え—日本語母語話者と
中間言語話者の比較—」『阪大社会言語学研究ノート』5:79-96 大阪大学大学院文
学研究科社会言語学講座
- 李吉鎔 (2005) 『日本語学習者のスタイル切り換え能力の発達—韓国語母語話者を対
象に』大阪大学博士論文
- 上仲淳 (1997) 「中上級学習者の選択するスピーチレベルおよびスピーチレベルシフト」
『日本語教育論集—小出詞子先生退職記念』149-165 凡人社
- 上仲淳 (2005) 「日本語日母語話者に特有のスピーチレベルシフト要因—中国語を母
語とする上級日本語学習者の接触場面から—」社会言語化学会第16回研究大会発
表予稿集 160-163
- 上原聡・福島悦子 (2004) 「自然談話における「裸の文末形式」の機能と用法」『世界
の日本語教育』14:109-123 国際交流基金
- 宇佐美まゆみ (2007) 『改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for
Japanese: BTSJ) 2007年3月31日改訂版』
<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj070331.pdf>
- 金澤裕之 (2008) 『留学生の日本語は未来の日本語—日本語の変化のダイナミズム』
ひつじ書房
- 迫田久美子 (2002) 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク
- 渋谷勝己 (1997) 「日本語学習者のスタイル切り替え—従属節の丁寧表現をめぐる—」
『無差』4:1-20 京都外国語大学
- 清水崇文 (2009) 『中間言語語用論概論 第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・
教育』スリーエーネットワーク
- 申媛善 (2009) 「韓国人日本語学習者の文末スタイルの運用—時間軸に沿った敬体使
用率に変化に着目して」『日本語教育』140:81-91
- 寺尾綾 (2010) 「文末形式の運用とスタイル切り換え—日本語を学ぶ中国語母語話者
の縦断データから—」『阪大日本語研究』22:113-142
- 野田尚史 (1999) 「「ていねいさ」からみた文章・談話の構造」『国語学』192:102-89
- 野田尚史 (2001a) 「学習者独自の文法の背景」『日本語学習者の文法習得』45-62 大修
館図書
- 野田尚史 (2001b) 「文法の理解と運用」『日本語学習者の文法習得』121-138 大修館図
書
- 野田尚史編 (2005) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
- 橋本貴子 (2002) 「英語母語話者のスタイル切り換え」『阪大社会言語学研究ノート』
4: 94-113 大阪大学大学院文学研究科社会言語学講座
- 橋本直幸 (2004) 「「～んですね」についての覚え書き—形式的記述からの談話機能を

- 探る一」『日本語研究』24: 1-15 東京都立大学国文学研究室
- 樋下綾 (2002) 「中国語母語話者のスタイル切り換え」『阪大社会言語学研究ノート』
4:114-130 大阪大学大学院文学研究科社会言語学講座
- メイナード, K. 泉子 (1993) 『会話分析』くろしお出版
- 峯布由紀・高橋薫・黒滝真理子・大島弥生 (2002) 「日本語文末表現習得の一考察—
自然習得者と教室習得者の事例をもとに—」『第二言語としての日本語の自然習
得の可能性と限界』科学研究費補助金研究報告書 pp 64-85
- Brown, P & Levinson, S (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge:
Cambridge University Press
- Cheshire, J & Bell, A (2002) Register and Style, *International Encyclopedia of Linguistics*
3:324-328
- Hakuta, K (1974) Prefabricated patterns and the emergence of structure in second language
acquisition, *Language Learning* 24:2 287-297

(いまむら けいすけ・首都大学東京大学院博士後期課程)